

これまでの実績を踏まえ、心の通い合う国際協力を推進する ——麗澤海外開発協会創立50年を迎えて	廣池 幹堂	2
財団（麗澤海外開発協会）設立のねらい	廣池千太郎	6

麗澤海外開発協会 活動の歩み

序章 財団設立までの経過 9

● 教育の視点に立った国際協力に携わる 竹原 茂 11

第1章 ラオスにおける支援事業 14

[1] 事業の目的	15
[2] 事業の概要	15
[3] 事業の経過	16
[4] 事業の成果	19
[5] ラオス教育支援事業	21
● 開発途上国に愛の手を差し伸べよう	淡島 成高 24

第2章 コスタリカにおける支援事業 33

[1] 事業の目的	34
[2] 事業の概要	34
[3] 事業の経過	35
[4] 事業の成果	41

第3章 ネパールにおける支援事業 42

[1] 「ティテパティよもぎの会」への支援	43
[2] もぐさ工場兼クリニック、無料巡回治療への支援	48
[3] ネパール大地震からの復興への支援	54

第4章 タイとカンボジアにおける支援事業 58

1 タイにおける支援事業	58
[1] メーコック財団への支援	59
[2] バンコク・スラムへの支援	61
[3] タイ・スタディツアーを定期的に行う	63
2 カンボジアにおける支援事業	67

第5章 未来を拓く継承と発展 70

[1] MIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）の事業を統合	70
[2] アジアの子供たちへの教育支援をめざしたチャリティーコンサート	72
[3] アジアからの留学生を招聘	75

一般財団法人 麗澤海外開発協会 定款	81
麗澤海外開発協会 活動年譜	87
一般財団法人 麗澤海外開発協会 歴代役員一覧	95

麗澤海外開発協会 活動の歩み

1971（昭和46）年に外務省所管の財団法人としてスタートした麗澤海外開発協会（RODA）の活動は、2008（平成20）年にMIRC（モラロジー国際救援運動推進委員会）を統合し、2013（平成25）年4月には内閣府より一般財団法人として認可され、2021（令和3）年に満50年を迎えました。今日まで、ラオスにおける養蚕開発事業、コスタリカにおける花卉栽培試験事業、また

ネパールで活動するNGO団体「ティテパティよもぎの会」への医療支援、タイ北部のメーコック・ファーム（現・メーコック財団）への支援、ラオスとカンボジアにおける学校建設等への支援、海外での自然災害に対する緊急支援、青年・学生・生徒たちを対象にしたタイ、ラオス等におけるスタディツアーなど、開発途上国を中心にさまざまな事業を行い、国際社会への貢献活動に取り組んできました。

また、2003（平成15）年には当時の当協会（のちに副会長）竹原茂（旧名：ウドム・ラタナヴォン／ラオス出身）の名を冠した「竹原基金」を設け、貧困等の理由で学校へ通えないアジアの多くの子供たちへの教育支援を進めています。

急速な発展を遂げる人類社会の繁栄の裏には、まだ多くの貧困と政治不安に苦悩する開発途上国の姿があることを、私どもは見逃すことができません。こうした深刻な諸問題に取り組んでいる開発途上国に対して、わが国として、また世界の平和、人類の幸福の理想に邁進する当協会として、その文化・経済面の発展に協力の手を差し伸べることは、当然果たすべき義務というべきでしょう。

当協会は、それぞれの時代、それぞれの国の様相とどう関わってきたでしょうか。今、これまでの50年間を振り返ります。

序章 財団設立までの経過（1964～1971.3）

麗澤海外開発協会は、1971（昭和46）年3月16日に外務省所管の財団法人として設立されました。総合人間学モラロジーの創建者・廣池千九郎（法学博士・1866～1938）の遺志に基づき、「開発途上国において文化・経済の発展に協力するため、国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福の増進に寄与する」という目的に基

づいたこの活動は、すでに1964年、ラオス王国の首都ビエンチャンにその一石を投じており、その数年来における活動が現地の人たちはもとより、わが国の政財界からも称讃を受けておりました。そこで、さらに組織的・計画的な施策に基づいた現地における技術指導などの産業面の協力はもちろん、生活態度、思想などの精神生活面においても、目的達成に努力するために財団発足の運びとなったのです。

ラオスでの調査は、麗澤大学の奥平定世教授（1902～1984、財団設立時の常務理事）によって1959年に始まりました。奥平教授は、以後、毎年ラオス各地を踏査し、1964年の初めにラオスの首都ビエンチャンの商工会議所会頭カンバイ・ピラパンデ氏から農業開発指導の要請を受け、レイタク・カンバイ農場を指導開発する話し合いが両氏のもとで成立しました。同年6月、廣池千太郎、長谷虎治の両氏が奥平教授とともに現地を視察、同年秋に廣池学園から2名が現地に派遣されました。

当時、財団はまだ成立せず、有志の浄財によって桑苗の栽培や試験的養蚕活動が始まり、また農機具、肥料、種等の物資支援も始まりました。この業績は高く評価され、1968年に廣池学園の廣池千英理事長*（当時）は財団設立の意志を発表、有力出力、有財出財、人心の開発と救済への積極的方法が示されました。しかしその年の8月、廣池千英理事長は急逝され、ラオス開発は理事長の遺訓として残されたのです。この協会は、廣池千英理事長の一つの大きな遺産ともいえるでしょう。



*廣池 千英（ひろいけ・ちぶさ）

1893～1968

モラロジーの創建者・廣池千九郎の長男として京都に生まれる。東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、富士瓦斯紡績株式会社、財団法人協調会参事を経て、財団法人道徳科学研究所（現・公益財団法人モラロジー道徳教育財団）第2代所長、学校法人廣池学園理事長、麗澤大学学長、麗澤高等学校校長、麗澤瑞浪高等学校校長等を歴任。



東京・帝国ホテルで開催された麗澤海外開発協会の設立披露パーティー（1971年5月24日）。挨拶されるのはチャオ・ニット・ノーカム駐日ラオス大使（右）

教育の視点に立った 国際協力に携わる ——元ラオス王国への協力を契機として



麗澤海外開発協会前副会長
麗澤大学名誉教授

竹原 茂

（旧名：ウドム・ラタナヴォン）

竹原 茂（たけはら・しげる）

1943年、ラオスに生まれる。1965年、文部省（当時）の国費留学生として来日。東京外国語大学を経て一橋大学経済学部を卒業し、ラオス政府経済計画省計画課長を務める。74年、再度来日して一橋大学大学院に入学。75年、ラオスでの共産党政権樹立によって帰国を断念して日本に亡命。以後、精力的に難民救済運動、国籍法改正運動、タイのメーコック・ファーム（現・メーコック財団）の設立・支援活動等に携わる。麗澤大学教授、麗澤海外開発協会理事・副会長等を歴任。現在、麗澤大学名誉教授。著書に『ラオス概説』（共著・めこん社）、『ラオス・日本、アジアに生きる——異文化理解と国際協力の理想を求めて』（麗澤大学出版会）等がある。

私と麗澤海外開発協会（RODA／Reitaku Overseas Development Association）との出会いは、1967年11月、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏と道徳科学研究所（現・モラロジー道徳教育財団）の廣池千太郎次長（当時）との対談の通訳がきっかけでした。当時の私は一橋大学経済学部3年生（開発途上国の経済開発専攻）でした。その前に私は、六本木のラオス大使館でラオス王国チャオ・ニット・ノーカム駐日大使と麗澤大学の奥平定世教授にお会いし、廣池千太郎先生とカンバイ氏との対談の流れについて打ち合わせをしました。その後は毎月、廣池学園等で奥平教授や協会設立メンバーと会うようになりました。

1971年4月から、私は麗澤海外開発協会の嘱託としてお世話になりました。主に「レイタク・カンバイ農場」事業計画資料等の翻訳や、ラオス政府関係者、廣池学園への訪問者に通訳をすることなどが業務でした。最も緊張したのは、同年5月24日の協会設立披露における廣池千太郎先生とチャオ・ニット・ノーカム駐日大使のご挨拶の通訳でした。このときの祝賀パーティーでは、日本の友人・柏原哲也氏のご協力で、在日

タイ留学生とフィリピン留学生による民族舞踊が披露され、会の雰囲気が盛り上がりました。

その他、貴賓館におけるチャオ・ニット・ノーカム駐日大使ご夫妻の歓迎レセプションや、サイヤーシット経済計画大臣とチャオ・カムヒン駐日大使（元国王の弟）の友好訪問歓迎レセプションにも準備と通訳をしました。その場で大臣が「今、ラオス政府ではウドムさんのような人材が必要です。ぜひラオスへ戻ってほしい」とおっしゃったため、廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様から「今、国家が君を必要としているときだ。ラオスに帰ったほうがいいと思う」とのお言葉をいただきました。そして1972年11月、妻と子供を連れてラオスに帰国し、経済計画省に計画課長として入省しました。帰国した後も協会の囑託のままでお手伝いをさせていただきました。

1973年2月21日、ラオス王国政府とベトナム・中国・ソ連がバックアップしたラオス共産党との「ラオス和平協定」がビエンチャンで調印され、1974年4月に第3次連合政府が成立しました。そして同年10月6日、私は、日本の文部省の奨学生（第2回目）として一橋大学大学院経済学研究科修士課程に入学するために来日。廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様のご理解を得て、廣池学園内の住宅に入れていただき、そこから国立市の一橋大学に通いました。奨学金だけで5人家族を養えず、協会の仕事を手伝いながら一部の生活費を援助していただきました。

1975年12月2日、ラオス共産党がラオス全土を制圧して王制を廃止し、ラオスは人民民主共和国（共産主義国）へと移行しました。その政変により、1976年3月、一橋大学大学院経済学研究科修士課程を修了した私は、ラオスへの帰国を断念し、そのまま日本に亡命（政治難民となる）し、1984年4月まで、協会の囑託としてお世話になりました。その間、日本の青年海外協力隊事務局と外務省研修所でラオス語とフランス語講師をするかわら、日本の国籍法改正運動に参加・協力し、インドシナ3国（ラオス、カンボジア、ベトナム）の難民救援運動等に協力し、主に①難民を助ける会（AAR）設立参加発起人、②アジア連帯委員会（CSA）設立参加発起人（常任理事）、③モラロジー国際救援運動推進委員会（MIRC）設立の呼びかけ、④在日ラオス協会設立（会長）に努めました。

1985年の夏には、日本の外務省と日本アフリカ協会の派遣でセネガル、アイボリーコースト（コートジボワール）、マリ、ニジェール、エチオピア、ジブチの6か国とフランス、英国を訪れ、1991年には、タイ北部チェンライ県での恵まれない少数民族の救援活動をするために、現地タイ人のピパット・チャイスリン氏と聖学院高等学校教員とともにメーコック・ファーム（現・メーコック財団）を設立しました。その後、1992年にMIRCの支援によって、同プロジェクトのインターナショナルハウスを建設しました。現在、同財団には麗澤海外開発協会からの支援も行われています。

また2003年からは、麗澤海外開発協会内に私の名を冠した「竹原基金」が設けられ、東南アジア諸国で貧困等の理由で学校へ行けない多くの子供たちのための教育助成事業も推進しています。東南アジアには、小学校を卒業しても、貧しいために中学校へ進学できない子供たちが大勢います。この基金の目的は、タイやラオス、カンボジアなど東南アジアの貧しい子供たちや少数民族の子供たちの教育を支援することにあり、その一環として留学生の招聘事業も進めています。

以上のように、麗澤海外開発協会は、ラオスから始まり、コスタリカ、タイ、ネパールなど開発途上国国民の生活向上のための援助に努力してきました。今、廣池幹堂会長のもと、このような国際協力活動のみならず、麗澤大学の卒業生やモラロジー関係の青年による開発途上国への協力、国際社会に貢献する若い世代の育成、ボランティアと交流活動への支援にもいっそう力を入れてきています。

これまでの麗澤海外開発協会に対する多くの方々のご支援・ご協力に深く感謝するとともに、今後の国際社会において協会の皆様がますますご活躍されるよう大いに期待しております。